



「みんな元気」と笑顔の疎開先の児童たち（永田町国民学校／山口光弘さん提供）

第2部

体験記

千代田区戦争体験記録集



空襲



15歳のとき、東京大空襲を目の当たりに
角田 実

防空壕の中で焼け焦げていた私の教科書
富川 昭枝

母が空襲の時にたった1つ持ち出した“枕”の中身
福地 貞子

大切な学校は空襲で焼けた
三輪田 芳子

15歳のとき、東京大空襲を目の当たりに

外神田で貸しビル業を営み、現在は会長職を務める角田実さん（86歳）。昌平小学校や神田ロータリークラブで戦争の悲惨さを伝え続けています。中学4年生（15歳）のときに経験した東京大空襲をはじめ、勤労働員や終戦の様子などについてお話をうかがいました。

B29の米軍マークが見えた

——まず、角田さんご自身についてお聞かせください。

昭和4（1929）年生まれで、86歳になります。生まれも育ちも外神田です。今でも、近くの昌平小学校や神田ロータリークラブで戦争の話や私の体験した3月10日の東京大空襲の話をして、いかに大変だったかを伝えていきます。

——空襲についてお話しいただけますか。

その当時の東京の空襲は、B29という爆撃機が焼夷弾を落として下町を焼き尽くすものです。東京の下町は木造家屋が多いから、それをどんどん燃やして、戦意を喪失させるというのがアメリカの戦略です。このあたりは幸いにもあまり人が死んでいないけれど、それでも亡くなった方がいますよ。かわいそうな人がたくさん

んいます。

——焼夷弾とはどのようなものですか。

焼夷弾はいわゆる爆弾ではありません。アメリカもちゃんと考えていて、爆弾を落とすのは工場で、民家を焼くのは焼夷弾。焼夷弾というのは、焼くためにあるものです。油脂焼夷弾ともいって、1発の中に50〜70発の六角形の鉄の棒みたいな小爆弾が詰まっている。それが空中でパッと飛び散って屋根などに突き刺さり、木造の家をみんな焼いてしまうのです。無差別爆撃というけれども、神田にあるロシア関連のニコライ堂や、築地にあるアメリカ関連の聖路加病院には焼夷弾を落とさないようにした。戦略は考えているわけです。

ドイツが負けて降伏したから、イギリスの方にいたアメリカの爆撃機も日本にほとんどやっけて来ました。グアム島やサイパン島、テニアン



総武線ガード下で当時のことを説明する角田さん



かくた みのる
角田 実

外神田

インタビュアー

伊達悠二（大学4年生）
横山嶺州多（中学3年生）
松崎璃々花（中学1年生）

島、硫黄島に飛行場を作り、基地で給油し、B29が日本本土へ爆撃ということになったのです。

どこの小学校にも警報機があつて、それが1分間鳴ると警戒警報。次に爆撃機が来るときは空襲警報。空襲警報は同じ1分間でも、短めに10回鳴ります。警戒警報発令後に空襲警報となるため、国民は警戒警報を聞いて避難の準備を始める。警報はラジオでも流れました。

——3月10日の東京大空襲について教えていただけますか。

日本全国で空襲がありました。昭和20(1945)年3月10日の東京大空襲は、最も多くの人が亡くなった空襲です。10万人以上が犠牲になりました。そのとき私はまだ15歳でした。

3月10日は陸軍記念日で、アメリカ軍が効果を上げるために爆撃してくるかもしれない、そんな噂はありました。初めに2機が来て、九十九里浜をグルグル回って偵察していました。それにより日本の電波探知機は妨害されていたのです。後ろには小笠原列島付近にまだ200機以上いるのですが、日本の電波探知機はそれを探知できなかった。つまり、最初の2機は本隊が探知されないように邪魔していたわけです。だから、夜中の12時頃に空襲警報が出たときは、江戸川あたりにもう焼夷弾が落ちていました。どうもおかしいという情報はあつたのですが、はっきりとは分からなかったんです

ね。最初の1発が落ちたと同時に空襲警報だからもう遅い。それが、東京大空襲の始まりでした。

そして、絨毯爆撃が始まりました。昭和通り、中央通り、明神下通りと、タテからヨコから焼夷弾を落とされる。両方から燃やしていけば、中央はみんなやられるでしょう。そんな戦略だったんです。江東・深川地区も同様です。

——角田さんはどこへ逃げたのですか。

私は家族と一緒に総武線のガード下に逃げ込みました。父親は警防団長をやっていたから一緒ではありませんでした。ガード下から中央通りの上空を見上げていたら、B29が1列に飛んでゆくのが見えました。それまでだいたい8000〜1万メートルの高度だったのが、10階建てのビルの高さくらいでしょうか。米軍のマークも見えました。それくらい低空で飛んでいたのです。その後、昌平橋まで逃げて、さらに今は再開発になっている淡路小学校(現在は昌平小学校へ統合)へ逃げました。そのあたりは焼けていませんでしたから。神田でも内神田や神保町の本屋街は最後まで残りましたが、外神田や和泉町、東神田、岩本町などは軒並みやられました。

亡くなった方は、火に焼かれるのもあるけれど、一酸化炭素中毒の犠牲者が多かったです。お母さんと子供が手をつないで一緒に逃げていると、ボタンとお母さんが倒れてしまう。子供は、「お母さん、どうしたの!」と泣き叫ぶ。



神田と大手町をつなぐ鎌倉橋。欄干には、昭和19年11月の米軍機による爆撃と機銃掃射の跡が残っている

B29
米ボーイング社の重爆撃機で、高度1万メートル、4トンの爆弾を積んで5500キロメートルの距離を飛行できた「超空の要塞」。昭和19年6月以降、まずマリアナ基地から、次いでグアムから日本本土を完全な射程距離に入れ、東京、大阪、名古屋など各都市を焦土とした。

お母さんは倒れたけれど、子供はちゃんと生きている。なぜだか分かりますか？ あたりはものすごい煙で一酸化炭素が充満しているから、それを吸ってしまったで一酸化炭素中毒になるのです。小さな子供は背が低いから一酸化炭素にまかれなかったんですね。

――防空壕には逃げなかったのですか。

自宅にも防空壕はありません。道に穴を掘り、屋根を作っていて、空襲警報や警戒警報が出たらそこに入りました。でもその日は、すぐに防空壕から出て、ガード下へ避難しました。うちも木造2階建ての家が焼けました。

防空壕に入ったまま亡くなった人も多かった。近くに神尾病院があつて（現在は駿河台）、その看護婦さん8人くらいが防空壕に逃げ込み、中で死んでいました。外に出たら危ないと思つてずっと中にいたのですが、やっぱり煙が充満して一酸化炭素にやられたんです。

――本当にひどい状態だったのですか。

妊娠中のお腹の大きいお母さんが3、4歳の女の子の手を引いたまま、小学校の裏で死んでいました。小学校の中に避難しようとしたけれど、中に入れなかったのです。当時、小学校は鉄筋コンクリートだから、焼けないで残るようになり、学校のまわりの建物を強制疎開させる、つまり建物を取り壊していたんです。

早く逃げてきた人は小学校の中に避難して、延焼を防ぐため鉄の扉を閉めた。さらに避難してくると、扉を15センチメートルくらい開けて

1人入れたらまたすぐ閉める。そうしないと火が入ってきて、せつかく中に避難した人も死んでしまいますから。小学校の中に入れた人は助かったけれど、入れなくて外にいた人は死んでしまった。まさに、生死の境です。空襲が終わってから、その親子の遺体を見ました。焼けたトタン板をかぶせてみんまで手を合わせていました。気の毒でしかたがありませんでした。小学校の外壁に手をついたまま死んでいた人もいて、その跡が残っていました。人間には脂があるから、手の脂が壁に染み付いているんです。戦争が終わって3、4年は、外壁のあちらこちらが黒ずんでいました。

芳林小学校に入れなくて、芳林公園に逃げた人たちも多かったです。公園には貯水池があり、消火のために水を貯めていました。背負っているリュックサックに火がついているからみんな水の中に入るのですが、水が熱湯になっている。その公園では、私の1級下の友達が亡くなりました。しばらく公園内に、ご両親が彼の名前を書いた木碑が立っていました。みんな花をあげていましたね。

――お父さんが警防団長ということですが…。

警防団長だった父は、団員と一緒に小学校に集まっていたんですが、どこもかしこも空襲で火災になっていくから、うちに帰って家庭を守ろうと解散しました。父は小学校から中央通りへ出たらしいのですが、中央通りも焼け始めていて、持っていた団旗に火がついた。だから上の



東京大空襲で上半分を焼失した警防団団旗の旗竿

旗を放棄して、下の棒の部分だけ持ち帰ってき
ました。戦後、父は「警防団の旗だぞ」と言っ
て杖がわりに使っていましたね。その団旗はう
ちに大切に保管しています。

勤労動員で羽田に通う

——当時は中学生とのことですが、どのような
学生生活だったのでしょうか。

私は芝中学校に通っていました。中学3年生
までは授業をやりますが、昭和19（1944）年、
勤労動員に駆り出され、中学4年生の2学期か
ら羽田の軍需工場に通いました。羽田の飛行場
の手前に荏原製作所があり、そこで潜水艦など
の部品を作っていました。もう戦争も行き詰
まっていた頃でしたから、いったい何を作って
いるのか分からなかったですが、鉄を一生懸命
こすっていましたね。羽田空港に行くと、今で
も工場の跡が残っていますから懐かしいです。

当時の中学は旧制中学校で、5年で卒業しま
す。私たちの代は1年短縮され、昭和20
（1945）年、4年生で卒業になりました。
4年生と5年生が一緒に卒業です。3月25日が
卒業式ですが、3月10日の空襲で芝中学校も全
焼してしまったから、増上寺の前の石段で卒
業式をしました。そのうちに雨がしとしと降っ
て来ました。卒業証書は謄写版を使ってザラ紙
に刷ったもので、判子だけはちゃんと押してあ
りました。それをもらったのを覚えています。



昭和20年8月米軍機からまかれた伝単（宣伝ビラ）

中学を卒業してからは法政大学の予科に7月から入学しました。学校のそばに軍需工場があって、午前中は11時半まで授業をやりました。英語の先生がいて、英語の授業もありました。軍需工場は学校から20分くらい離れていて、授業が終わると駆け足で向かいました。軍需工場へは1カ月半くらい行きましましたね。

終戦と聞いても安心できなかった

——それで終戦を迎えたのですね。8月15日の玉音放送を聞いたときの様子を教えてくださいませんか。

当日の朝、ラジオから「本日正午、天皇陛下の放送があります」と流れました。そのときは、「これはいよいよロシアと戦争するのかな」と思いました。でも、お父さんが丸の内警察署の署長をしている友達がいるので、「角田、戦争が終わるらしいぞ」と言うのです。「終わってなんだよ」「よく分からないけど、終わるらしい」「じゃあ、中立条約かなあ」「そうかなあ」。そう言い合っていました。

玉音放送は軍需工場の本社の前にみんな整列して、立ったまま聞きました。半分くらいしか聞こえませんでした。「堪え難きを堪え」という言葉は分かりました。「ああ、やっぱり戦争が終わるのだな」と思いました。

でも、その前から街にはいろいろなビラがまかれていました。アメリカが、日本がポツダム

宣言を受諾する方向になっているというビラを飛行機でまくのです。憲兵からは、拾ったビラは全部提出するように言われていましたが、私はそれをこっそり取っておいて今でも残しています。友達から戦争が終わると聞いたときも、「あのビラはある程度、本当のことが書いてあったのかな」と思いました。人にはあまり言えなかったけれども、でもまさか、無条件降伏だとは思っていませんでした。

玉音放送を聞いてどう思いましたか。

戦争が終わったと聞いても、信じられなかったです。自宅は焼けてしまっていたから学校近くの知人の家にいたのですが、それまで夜は灯りが漏れないよう電気に黒い布で傘をかけていたのを、15日の夜は「戦争が終わったらしいから、明るくしてもいいかもしれない」「いや、分からない。危ないぞ」「じゃあ、ちょっとだけ明るくしようか」と、黒い傘を半分だけ上げました。本当に戦争が終わったのかどうか信用できない、そういう気持ちがあったのですね。

——それなら翌朝、警戒警報が鳴るんですよ。「やっぱり、終わっていないんだ」と思いました。警戒警報のあとにB29が1機飛んできました。ところが、焼夷弾も爆弾も落とさない。何もせずにそのまま帰っていきました。つまり、偵察に来たのですね。B29を見たのはそれが最後でした。「ああ、これで空襲はもうないのかな。安心のかな」と、その夜からは灯りの傘を全部上げました。「明るいねえ」とみんな笑顔で



衣料切符



罹災証明書

話したのを思い出します。

——終戦後の生活はどうだったのでしょうか。

終戦後はとにかく物がありませんでした。特に食料は苦労しました。清瀬でサツマイモを売ってくれると聞き、母から言われて日曜日にリュックサックを背負って友達と買い出しに行きました。なるべく遠くまで歩いたほうがいいだろうと、清瀬駅から30〜40分くらい離れた場所へ向かいました。農家を訪れて「サツマイモを分けてもらえるところがあると聞いて、東京の神田から来ました。お願いします」と頼む。でも、「せっかくなるところ悪いけれど、ないからダメだよ」と断られます。さらに遠くへ歩いて行きました。すると、「本当は分けられるぶんはないんだけど、せっかくなんだから、少しでも分けてあげよう」と、分けてもらうことができた。もちろん、お金は払います。「じゃあ、1本余計にあげよう」ともらったサツマイモ。あれが嬉しくてね…。

当時は統制経済とうせいけいぎといって、食料や衣料は配給でした。配給以外で売り買いするのは闇売買です。闇だとお金を余計に払うのですが、物がないときはしょうがない。それを商売にする人もいました。闇で仕入れた食料を持ってきて池袋や上野の駅で売る。そうすると、買った価格より2〜3倍高く売れます。駅では警察が取り締まりをして、私もそういう闇商人と間違えられるのではないかと心配しました。けれども、警察も商売をしている人は分かるのでしょ

ね。ベテランの闇商人は警察に呼び止められると、すぐに逃げて行きますから。でも、日曜日に家族の分だけを買ってくる人は警察官もちゃんと分かっている。「よし、行け」と言ってくれました。そんな時代でした。

——貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございます。最後に、僕たち若い世代へメッセージをお願いします。

戦争は悲惨ひさんです。軍隊だけの問題ではない、一般の国民がみんな犠牲ぎせいになってしまうんです。戦争は悲劇だということを再認識し、よく心に留めておいていただきたいと思います。



写真左から、松崎さん、横山さん、角田さん、伊達さん

配給切符制

生活必需品はあれもこれも足りなくなった。それを公正確実に分配するということで切符と引き換えに配給された。東京では、昭和15年6月5日から砂糖、マッチなど各種の日用品が切符制になった。マッチの割り当ては1日1人5本、衣料は1人年間100点で背広は50点、ワイシャツは12点だった。

防空壕の中で焼け焦げていた私の教科書

4月の空襲で実家のお風呂屋さんが全焼。5月には引越し先の青山でも空襲で親子3人、命からがら逃げのびる経験をしたという富川昭枝さん(86歳)。焼けてしまっ
ていちばん悲しかったのは、教科書やえんぴつなどの勉強用具だったそうです。

実家は神田のお風呂屋さん

富川さんのご実家は、お風呂屋さん(公衆浴場)だったそうですね。

父が始めた小沢湯は、神田神保町2丁目にありました。今はすっかりビルばかりになりましたが、戦前は神田も人がたくさん住んでいて、お風呂屋さんはとても繁盛したのですよ。兄3人と姉2人の6人兄弟でしたが、末っ子の私も小さい頃から店の手伝いをしたものです。小学校に上がってからは、前の日に使った木の桶をお日様に干すのは私の役目。歩道と車道の境目に1つずつ重ねて乾かして、日光消毒するの。それを終えないと、学校に行かせてもらえないんです。

朝からたいへんですね。

母がとても厳しい人ですね。「私たちはこれで

ご飯を食べているんだよ」が、口ぐせでした。

戦争当時は、学生だったのですか。

小石川にある村田女子商業学校まで、都電で通っていました。あの頃の都電は本数が少なく、いつもお客さんでぎっしり。座れることなど滅多にありませんでした。ある時、せっかくだ買ってもらった腕時計を電車の手すりと身体の間で強く挟んで文字盤が壊れてしまったのは、本当に悲しかったですね。

学校の様子はどんなでしたか。

戦争が激しくなるにつれて先生が疎開してしまったり、英語の授業がなくなったりと、だんだんと勉強できる雰囲気ではなくなっていました。昭和18(1943)年からは女子学生も女子挺身隊として勤労奉仕をすることになって、同級生はみな電話交換手になったんです。まず外苑前の青山電話局にあった養成機関で交



爆弾で吹き飛ばされた交差点で当時のことを説明する富川さん



とみかわ あきえ
富川 昭枝

西神田

インタビュアー

安田律子 (大学院2年生)

長嶋 泰 (大学1年生)

松崎瑠々花 (中学1年生)

換手の仕事を覚えて、私は新宿の牛込電話局で働きました。同じ学校の生徒でも派遣場所は違っていたので、今もクラス会があると「あなたはこの電話局？」「私は東京無線の工場だったわ」と話題になるんですよ。

4月の空襲で自宅が全焼

——空襲のお話を、聞かせていただけますか。

空襲がひどくなった頃、神田の家には両親と私の3人だけしかいませんでした。長兄は病氣療養のため郊外に住んでいて、下の兄2人は出征、上の姉は義兄の北陸の実家へ、下の姉もご主人の赴任先の中国で暮らしていました。

4月13日の空襲では、リヤカーにお布団とか食器類、ラジオなどを積み込んで学士会館の裏手まで逃げました。神経痛で思うように足が動かない父がリヤカーの舵を取り、私が必死で後ろから押したんです。しばらく学士会館のところにいたのですが、後で合流するといっていた母がなかなか来ない。そのうちトイレにも行きたくなくなってしまったものだから、私は一度、家に戻ったんです。

——お母さんは、家にいらしたのですか。

ええ。戻ってきた私の顔を見てびっくりして、「靴なんて脱がなくていいから、早く用を足して逃げなさい！」と怒られました。私は「お母さんも、ここにいたら危ないから一緒に逃げよう」と必死に頼んだのだけれど、母は「私は家

を守る」と言っていて、頑として動いてくれない。でも爆撃の音は近づいてくるし、仕方なく母を置いて、私は家を飛び出したんです。

それで神保町の交差点まで来たときに、遠くから何か異様な音が聞こえてきました。あわてて交差点の植え込みにあった防空壕へ逃げ込もうとしたら、そこへ爆弾が落ちてきたんです。私は身体ごと吹き飛ばされ、交差点にあった写真屋さんのショーウィンドーに叩きつけられました。

一瞬気を失って、あつと気がついて起き上がったたら、頭から背中から、粉々に砕けたガラスがじゃらじゃらーって落ちてきたのを覚えています。

——ケガはなかったのですか。

それがね、かすり傷ひとつ負わなかったんですよ。当時は、避難するとき必ず防空頭巾をかぶっていました。私の頭巾は、一緒に作ってくれた母が「もっと綿を入れなさい、入れなさい」とうるさく言って、ふかふかの座布団みたいに厚ぼつたくなっていたんです。学校に持っているときは恥ずかしかったけれど、その厚ぼつた綿のおかげで助かったのね。

それで、何とか起き上がって家の方を見たら、交差点から水道橋にかけて白山通りの左側は煙で何も見えませんでした。

——自宅に残ったお母さんは…。

とにかく私はいったん父の所まで逃げて、空襲が終わるのを待ちました。早朝にB29が飛び

勤労奉仕

国民勤労報国協力は、昭和16年11月に公布、同年12月に施行された勅令。14歳以上40歳未満の男子、14歳以上25歳未満の独身女性を対象に勤労報国隊が編成・動員され、無報酬で軍需工場や農家などの勤労に従事した。

防空頭巾

綿をたっぷり入れた1辺が60センチメートルほどの四角い布団を2つ折りにして縫い合わせ、頭から肩まですっぽり包める頭巾。爆弾の破片などから身を守るため被った。鉄かぶとに比べ軽く、水に浸して被れば火からも安全で、女性や子供には防寒具としても重宝された。



4月13日の空襲時、富川さん一家はリヤカーに生活道具を積んで学士会館裏手へ避難した（学士会館精養軒提供）

去ってやっと静かになったところ、学士会館の前の道まで出て来たら、交差点の方からとぼとぼ、とぼとぼ歩いてくる人影が見えるんですよ。

それが、母でした。顔じゅうすすで真っ黒。

そして「もう家はダメ。なんにもない」って吐き出すように言いました。その言葉通り、夜が明けて3人で戻ってみたら、見事に何ひとつ残っていませんでした。残ったのは鉄筋コンクリートのボイラー室と石炭小屋だけ。後は何もかも燃え尽きたっていうかね。昔のお風呂屋には、脱衣場と浴室の間に50〜60センチメートルもあるような大黒柱が立っていたものなんですよ。その柱の、燃えかすひとつ残っていませんでした。ただただ、茫然とするばかりでしたね。

1カ月半後、避難した先でふたたび空襲に

——自宅を焼け出された後、どうされたのですか。

青山に姉夫婦が住んでいたのですが、富山に疎開して空き家になっていた。そこへ親子3人で避難することにしました。

ところがわずか1カ月半後の5月25日、世田谷から渋谷、青山、赤坂まで山の手一帯が大空襲に遭ってしまったのです。父が「外苑前の絵画館（明治神宮・聖徳記念絵画館）まで逃げよう」と言うので、またリヤカーに家財道具一式を積んで親子3人で逃げました。でも今の國學院高校があるあたりには近衛第4歩兵連隊が

あって、そうした軍の施設は集中的に爆撃されるんですよ。4月の空襲どころではない、ものすごい量の爆弾・焼夷弾が落ちてきて、それはもう恐ろしい目に遭いました。

歩兵連隊と神宮球場の間には植え込みがあった、そこに何に使ったものか、50〜60センチメートルの穴がいくつもあいていました。それを母が見つけて「あそこに飛び込め！」というので、3人でバラバラの穴へ飛び込みました。歩兵連隊の建物から落ちてくる火の粉を払いながら、小さく身をかがめているしかなかったんです。

今でも覚えているのは、その穴から、野球場の屋根の下につながれた軍馬が5〜6頭見えたこと。歩兵連隊の馬を避難させていたんでしょうけど、馬たちだって火を見たら恐ろしいから、必死で暴れてね。兵隊さんが全身の力を込めてたづなを引いてなだめていたけど、もし植え込みの方へ駆け込んで来たらどうしようと、それも本当に恐ろしかった。誰かが袋を持ってきて、馬の頭にかぶせておとなしくさせるまで生きた心地がしませんでした。

——持っていたリヤカーは？

辺りが延焼してくると、火風といって、火が風を呼ぶんですね。その風でお布団を積んだりヤカーが、ひとりりで散歩に行っちゃう。それを父が穴から出て引っぱり戻して、また風に持って行かれるというのを繰り返しました。

そうして一面が火に囲まれると、辺りがものすごく熱くなるんです。息を吸おうにも、空気



昭和20年2月25日にB29の爆撃により全焼した五十稻荷神社。
狐の台座は、戦災により熱で黒くただれている



が熱くて喉がカラカラに渴いてしまう。思わず顔を伏せたら、地面に近い空気はまだ冷たかったのね。それをすーっと思い切り吸って息を止めて。それでなんとか命がつながりました。

——青山のお家は、どうなったのですか。

B29が去ってから戻ってみたら、跡形もなかった。逃げる前にちよつとした家財道具や細々したものを、庭の防空壕に入れて行ったんですよ。ふたをして土をかぶせ、1メートルもあるような火鉢を上に乗せてね。だけど火鉢だって、こっぱみじん。防空壕の中のものも、全部焼けていました。

——防空壕といえども、安全ではないんですね。

ええ。いちばん悲しかったのは、教科書からノートから、ぜんぶ焼けてしまったことです。えんぴつ1本、残らなかつた。みんな灰になっちゃつて。あんな悲しい思いは二度としたくないし、今後も決して、あつてはならないと思います。

——近所の皆さんは、ご無事でしたか。

焼け跡に戻ってみましたら、隣組の方たちに「今まで、どこに行つてたの!」と驚かれて。皆さんは青山墓地に逃げたんですつて。外苑前は軍の施設があるから危ないと、地元の方はよくご存じだったんですね。私たちは、そこをめぐって突っ込んでくような逃げ方をしてしまつたわけです。生きて帰つて来られたのが、奇跡のようなもの。ただもう、運が良かったとしか言いようがありません。

語らなかつた空襲体験

——そんな空襲があつてもまだ、「日本には神風が吹く」と言われていたのでしょうか。

ええ、政府も国民もその言葉に煽られていたんでしょね。でも今考えれば、神風も大和魂もあつたもんじゃない。あちら(連合国側)はボタン1つで、高度何千メートルから街ひとつを焼け野原にできるのですから。精神論なんかで戦えるわけがないんですよ。

東京は空襲でめちゃくちゃになつていくし、そのうち広島や長崎に「新型爆弾が落ちたらしい」と学校でも噂になつて。お友達と、「どうしよう、日本つて国がなくなつてしまふんじゃないかしら」と話したものです。

原爆のことは戦後に詳しいことを知つて、たいへん衝撃を受けました。一瞬に何万、何十万という方が亡くなられたと聞いて、そのことに比べれば、私たちが空襲で逃げ回つた体験なんて微々たるもんだ、命があつただけありがたかつたと思うようになりました。

ですから私は、空襲のことは自分からあまり人に話したことがないんです。つい最近も、同年代のお友達が病院から退院したというのでお電話をしたとき、「お互いに戦争も体験して、よく生きながらえた」という話になつて。そのとき「富川さんは、戦争中どこにいたの?」と聞かれたので、「神保町と青山で、2度も焼け出されたのよ」という話をしたら、「長いお付

防空壕

家の床下を深く掘つたもの、庭に掘つた穴を丸太と板で覆い、土を被せた「避難所」が大抵。町内にも共同壕ができ、空襲警報が出ると入れられた。雨で水浸しになり、家財道具を台無しにするケースもあつた。戦後は、焼け跡の壕で生活する人も少なくなつた。



き合いなのに、初めて聞いた」って。

だから原爆のお話もして、「私なんかどうにか生きてこられたのだし、戦後はいい思いもさせてもらったと思う。今もこうして生きていることが嬉しいわ」と話したら、電話の向こうでお友達が黙ってしまってたね。どうしたのって驚いて聞いたら、「あなたの話を聞いて、泣いちゃったのよ」って。「病み上がりには、いやなことをお聞かせしちゃったわね」と謝りました。

サツマイモも育たない焦土の神田

——青山のお家も焼けてしまって、その後はどうなされたのですか。

しょうがなくて、また神保町に戻ってきました。あたり一面焼け野原でね、白山通りに立って水道橋の方を見上げると、駅のホームで電車を待っている人が見えたものです。

——今では考えられないですね。自宅はすっかり焼けてしまったとお聞きしましたが。

鉄筋コンクリート製のボイラー室と石炭小屋だけ、焼け残っていたでしょう。そこへ父が半分焼けたようなトタンや廃材を拾ってきて、床やら屋根を作ってくれて、なんとか寝泊まりできるようになりました。

——食べる物は、どうしたのですか。

配給が、ときどきあったんですよ。でも「今日は雑炊だから」と言われて並んで待っていたら、配られたのが味噌汁のようなものでね。

お鍋を底からすくっても、ヒエとかアワとかコウリヤンしか入ってない。お鍋の中に、白いお米が、ぼつんぼつんと浮き沈みしていたのを覚えていきます。

敷地に野菜を育てようと思っても、焦土というのは野菜がちゃんと育たないのね。あるとき母がどこからサツマイモの苗をもらって植えたけれど、これっぽっちの、人差し指くらいのお芋しかできないんです。普通だったら捨ててしまうような、サツマイモの茎や葉っぱまであく抜きして食べましたよ。

——煮炊きするのにも、苦労したのでは。

皆さん、そうだったと思いますよ。それで母が、どこをどう思いついたのか、炭団を作って売り始めたんです。

あの頃、三崎町に通信省（郵便や通信を管轄する省庁。後のNTT、日本郵政など）の車庫があって。戦争が激しくなってガソリンがなくなってから、赤い郵便自動車も木炭で走っていたんです。その炭俵をゴザの上でぼんぼんはたくと、炭の粉が落ちるでしょう。母は車庫の人に許可をもらって、炭の粉を集めては荒木田という粘土（荒川沿岸の荒木田原に産した壁土用の土）と混ぜて、おだんごにして天日で干して。そうやって炭団を作ったんです。

——すごいアイデアですね。

それを丸の内や呉服橋の方まで、母と一緒に売りに行きました。1人が買ってくださいると、口伝えで評判を聞いた方も集まってくれて。よ



錦水湯の看板。現在は自宅に飾ってある

く売れましたよ。そのお金で、闇市で売っている食べ物を買ってそれでしばらく食べつないでいました。

帰ってくる家族のために新しい家を

——でも、トタンと廃材の掘った立て小屋では不便も多かったでしょう。

それを見かねてか、同業の組合長さんから「西神田の錦水湯を買わないか」というお話が来たんです。その建物は焼け残っていましたが、持ち主が戦争を避けて田舎に帰るということでした。母は「明日どこるか、今晚にも空襲で焼けないとも限らないのに。そんなときに家を買ってどうするんですか」と猛反対。けれども父は「戦争に行ってる次男や三男もいつか帰ってくる。長女や次女が、家をなくすかもしれない。みんなが帰ってきたとき、どこで寝るんだ」って。

それから毎日、大げんか（笑）。でも父が、「小沢湯は借地だったが、錦水湯は土地付きだ。焼けたって土地が残るから、掘って立て小屋を建てればねぐらになるだろう」って。ああ男の人って、そういう考え方をするんだなあと感心しました。母も最後には折れて、なんとか資金をかき集めて錦水湯を買い取ることにしたのです。

そしてボイラーや設備の手直しを始めたのが8月。1週間か10日後が、終戦でした。玉音放送を聞いた父は「しめたーっ！」と叫びました

よ（笑）。

——本心からの言葉だったでしょうね。

ラジオは、元の小沢湯のボイラー室で聞きました。母は「あー、負けた負けた」と言って、外へ出ていきました。私も「ああやっぱり」という思いしかなかった。

だんだん日が暮れてきて、神保町の交差点あたりまで出て来たら、坂の上の近衛連隊の辺りで赤々と何かが燃えているんですよ。近所の方に「あれは何でしょう」と聞いたら、「秘密書類を燃やしてるんだよ」って。取っておいたら証拠になるものを、隠蔽するためにみんな燃やしたんでしょね。

家族14人が食べるため、ダンスが空に

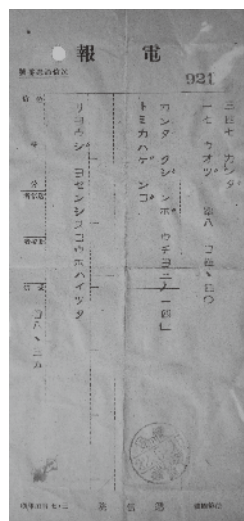
——終戦後、出征していたご兄弟は戻って来られたのでしょうか。

次男は、結婚して荒川区の尾久でやはりお風呂屋をやっていました。戦争へ行っていたんではお嫁さんも店を畳んで、田舎へ帰っていたんですね。8月20日頃になって、焼け野原の神田へお嫁さんが1人でやってきましたね。兄が中国で戦病死したって公報を持って。日付は昭和19（1944）年の9月になっていました。

長男が病弱だったこともあり、両親は次男をいちばん頼りにしていたんです。それが死んだと聞いて、母はその場で泣き崩れました。それはもう、かわいそうで見えられないくらい



兄の骨袋には、骨箱の中に預金通帳が1枚入っていた



昭和19年9月にお兄さんが亡くなったことを知らせる公報（電報）

嘆き方でしたね。

骨箱も一緒に届けてくれたけど、何も入っていないんじゃないかってくらい、軽かった。だからお墓にもおさめずに、ずっと自宅の仏壇の下へ入れておいたんです。戦後20年以上たって、父が亡くなる前に「開けてみてくれ」というので中を見たら、預金通帳が1枚、出てきましたよ。それはまた仏壇の引き出しへしまつて、骨箱はお世話になっているお寺の住職さんに頼んで、処分してもらいました。

——その下のお兄さんは。

昭和21（1946）年3月、ようやく復員してきました。母は「よく帰ってきた」って泣きましたけれど、「そのまま家に入っちゃダメ！」って。玄関でよつてたかって身ぐるみはがして、お風呂場へ連れていって頭から洗いました（笑）。着ていた軍服も、すぐにボイラーで燃やしました。

——えっ、燃やしちゃったんですか。

シラミが大変なんですよ。

——お姉さんたちは。

中国にいた次女たち一家は、昭和21年5月頃に着の身着のまま戻って来ました。姉は大きなお腹で、子供を背負って。義兄は大きなリュックに生活資材を詰め込んで。命からがら逃げてきたようでした。

富山へ疎開していた長女一家も、青山の家が焼けてしまったから、6人全員で神田の家に転がり込んできました。終戦までは3人暮ら

しだったのが、一気に14人家族へふくらんでしまいました（笑）。

——にぎやかになりましたね。

とはいえ終戦直後はものが不足していましたから、全員に食べさせるのも一苦労。担ぎ屋さんにお米や野菜を持って来てもらうには、代金を払ったうえに、着物を渡して「次もまた持ってきてくれ」と頼むしかなかった。その着物は、戦争中に茨城県の農家を借りて保管していた母のものでした。せっかく戦火をまぬがれたのに、大所帯を養うため、あつという間にタンスは空っぽになってしまいました。

**ペンを鉄砲に持ち替えることだけは、
しないぞっつ**

——お風呂屋さんは、いつから開業したのですか。
父が毎日のように手を入れて、やっとなんとか9月半ば頃に商売が始められたと思います。そうしたらもうねえ、お客さんが入って入って。「もう燃料がないから閉めます」と言っても、「水だけでいいから、浴びさせてくれ」って。

——富川さんも、お手伝いをされたのですか。

家業ですからね。ただ私が今も心残りに思うのが、学校に戻れなかったことです。終戦までの2年間は、学生だったとはいえ女子挺身隊の仕事でほとんど勉強らしい勉強ができなかった。戦争も終わったのだし、「あと2年間でもいいから、学校へ行かせて」と必死で頼んだので



すが、母は許してくれませんでした。「今うちが、どんなことになっていくか分かるでしょう」と。新しい家と店のために、当時のお金にしてもものすごい金額を銀行から借りていましたから。私の学費は出せないってことなんですよ。もう悔しくって悔しくってねえ。しばらくは母親と口もきかない、目も合わせない日が続きました。

何年前か、やっぱり仏壇の下を整理していたときに母校の名前が入った紙が出てきて。何かしらと思ってみたら、卒業証書でした。ぺらっぺらの、わら半紙一枚のお免状^{めんじょう}。日付は、昭和21年の3月になっていました。

——学校には通えなかったんですね。

ええ、でも卒業したことにされたんでしょうね。そういう人がいっぱいいたんだと思いますよ。同級生には、亡くなった方も多いですから。本当にもう、その日その日、食べていくのがせいっぱい。自分で勉強しようと思って教科書やノートが欲しいと頼んでも、「そんなお金はどこにもない」と突っぱねられるばかりでした。

戦争っていうのは、戦争だけじゃなくて、後遺症^{いしづ}も残るんです。うちの家族だけだって、とうてい口じゃ言えないことがいろいろと起ききました。戦争ほどじめなものはありませんよ。

——そうした体験をしてこられて、今、私たち若い世代に伝えたいメッセージはありますか。しょうが。

戦争だけは、絶対にもうやらないでいただきたい。私が味わったような、何もかもなくしてしまったという空虚^{くうきょ}な思い。それは、人の日常の中にあってはならない感情なんです。

もう一つ、若い方お一人おひとり、進む道はみんな違っていても、勉強できるチャンスは逃さないでいただきたいの。いくつになっても、働いていても勉強はできるといいます。でもね、やっぱり頭も体も年とともに衰えていくんですよ。一生懸命に勉強できる時期は、限られています。自分に与えられたチャンスを逃さないで、どんどん欲張って勉強していただきたい。

日本はいままた国際的に、難しい状況に置かれていると思います。それでも何とか外交と話し合いで、他国から信頼される国であり続けてほしい。そうしてあんな間違った戦争だけは、二度と起こさない国にしてください。ペンを鉄砲に持ち替えるようなことだけは、していただきたくない。それだけは、お願いします。



写真左から、長嶋さん、松崎さん、畠川さん、安田さん

母が空襲の時にたった1つ持ち出した“枕”の前身

町で理容店を営む家の長女に生まれた福地貞子さん（87歳）。勤労働員きんろうどういんに明け暮れた女学校時代、空襲が激しくなった頃の生活、また麹町、神田地域が大きな被害に遭った昭和20（1945）年5月の空襲の様子などをお話しいただきました。

学校がプロペラの工場になって

福地さんは、麹町のご出身のですか。
生まれてから87年間、ずっとこの辺りに住んでいます。空襲（昭和20年5月25日）で焼け出されてから、2、3軒隣の区画に移りましたけれど、番地はずっと一番町です。

戦争当時の家族構成を教えてください。

実家のあった場所で理容店を開いていた父と、母。私が長女で、その下にそれぞれ3歳違いで弟が3人いました。小学生だった2番目の弟は、空襲がひどくなってから、三鷹の方へ祖母と疎開そかいをさせていました。当時、「竹やぶにいと爆弾が当たらない」という話があった——本当かどうか、知りませんよ（笑）——竹やぶの中の小さな家を買って、弟はそこから三鷹の小学校に通っていたんです。

終戦のとき、福地さんは学生だったのですか。

いえ、その前の年に女学校を卒業し、「自宅から通える職場にしなさい」と父に言われて麹町区役所に勤めていました。麹町の出張所を管轄かんかつする仕事でしたので、お付き合いがあるのもご近所の知った方ばかりで、心強かったのを覚えています。

戦時中の学校生活について教えてください。

私は昭和16（1941）年に尋常じんじょう小学校を卒業しましたが、当時は小学校でも、なぎなたの授業がありましたよ。バケツリレーの練習もしました。それから女学校に進んだけれど、英語の授業はなくなっていました。

英語が習えなかったんですか？

敵性語てきせいごでしたからね。英語だけでなく、ちゃんとした授業があったのは2年生の頃までだったと思います。その後は学校が工場になってし



ふくち さだこ
福地 貞子
一番町

インタビュアー

三輪田颯真（中学1年生）
吉岡さくら（高校2年生）

まって、最後の1年間はまったく勉強できませんでした。

——学校が、工場に？

立川にある飛行機の工場へ勤労働員される予定が、通うのは遠いということ、学校に部品を運んで作業することになったのです。詳しいことは分からないけれど、プロペラの一部だと教わりました。つまりあなた方がふだん勉強しているような教室の机の上で、プロペラの部品をせっせと組み立てていたんですよ。女学校の制服を着て（笑）。それが授業だったの。

——その頃の夢とか、将来なってみたい職業はありましたか。

ありません。夢なんてあっても、そうはなれないんですもの。考えたってしょうがないと思っていたんじゃないでしょうか。毎日毎日、空襲に遭ったら火を消すためのバケツリレーや、なぎなたで敵を倒す訓練ばかり。戦争のことしか頭にありませんでしたから。

麹町から四ツ谷までが焼け野原に

——空襲のことを、教えてください。

空襲がひどくなってきたのは、昭和19（1944）年の終わり頃からです。麹町1丁目の交差点あたりに墜落したB29を見に行ったことがあります。1区画分が覆われるほど大きかったという記憶があります。

——その大きな機体に、たくさんの爆弾を積ん

でいたのです。

空襲は本当に恐ろしかったですよ。いつ空襲警報が鳴るか分からないので、すぐ逃げられるように毎晩、服を着たまま布団に入っていました。終戦までの2年間ほどは、パジャマを着て寝たことがなかったの。「どここの方面からB29が来る」という警報を聞いたら、荷物を持って逃げるのです。

昭和20年の下町大空襲では、翌日に深川の方に住んでいた女学校のお友達が登校しないので、「どうしたのかしら」と話していたら、亡くなっていったことを後で知りました。

——お知り合いも、亡くなっているのです。

5月25日の空襲では、私たち家族も命からがら逃げました。私は中学生の弟と一緒に、一番町の自宅からイギリス大使館の方へ逃げたのですが、近衛の兵隊さんに「ここは危ないから通れない」と止められてしまって。塀を登れば逃げられるというので、そこへ荷物を置いて必死で竹橋の方まで逃げました。走っている途中でも、目の前に焼夷弾がどンドン落ちてきて、それはもう怖かったですよ。

空襲が終わったというサイレンを聞いて、一番町の方へ戻りました。イギリス大使館の横まで来たら、四ツ谷の方までぜんぶ焼け野原になって、丸見えになっていたのを覚えています。

——何にも、なくなっちゃったんですか。

——何にも、なくなっちゃったんですか。

——塀のところにおいていた荷物は？

焼夷弾

油脂または黄燐（おうりん）を使った強燃焼性の「爆弾」。数10本の小爆弾を詰めた親爆弾が目標の空中で爆発すると小爆弾が飛び散り、火災を発生させ、水を注げば炎が大きくなる厄介なもの。火たたき、防火用水など役に立たなかった。



5月25日の空襲時、福地さんはイギリス大使館の方へ避難した

ないない(笑)。きっと焼けちゃったんでしょ。う。

——福地さんの家も、焼けてしまったのですか。
ええ。そこで母を待ったのですが、なかなか帰ってこなくてね。生まれてすぐの弟をおぶって逃げていましたから、すごく心配しました。そうしたら私たちから2時間くらい遅れて戻ってきて。母たちは靖国神社に逃げて、いつもは入れない本殿へ上げてもらって助かったそうです。

そのとき母が大事そうに枕を抱えているから、「どうしてそんなものを」と聞いたたら、中にお米がぎっしり入っていたの。昔の人の知恵ってすごいわね。そうして、すぐ持ち出せる物の中に食べ物を入れていたんですよ。

——でも台所も焼けてしまったのでしょうか？

議員会館の運転手さんの寄宿所が焼け残っていたから、そこで炊いてもらった覚えがあります。ご近所の方にもお配りして、よろこんでいただきました。それから、焼け出された人たちが避難していた九段小学校のあたりに、パンの配給が来たのを覚えています。パンだけでも、ありがたかったですよ。

——町内でも亡くなった人は多いのですか。

四ツ谷方面へ逃げた方は、助からなかったようです。お世話になっていたお医者さまと看護師さん、それから町内会長さんのご夫妻が亡くなって。ちゃんと火葬ができる状況でもなかったの、それぞれご自宅の庭に穴を掘って火葬

にしている…むごい光景でしたね。あれは本当に思い出したくないです。

——自宅が焼けてしまったから、どこで暮らしていたのですか。

祖母と弟がいた三鷹の家へ、上の弟と私で向かうことになりました。電車も動いていないから、新宿までまず歩いて。そこで大きなトラックが来て、「どこまで行くんだい」と聞かれたので「三鷹まで」と答えたら、「大変だから乗せていってあげる」と言ってくれたのです。

玉音放送は、その家で聞きました。

——放送を聞いて、どう思いましたか。

やっと終わったのかな、と思いました。

——戦争に負けて悔しいとかではなくて。

まだ16歳でしたから。陛下のおっしゃることを、ただばーっと聞いていた気がします。目の前で人が焼夷弾に当たって死ぬような恐ろしい思いをした後ですから、とにかく終わってほしいとしたというか。

——周囲の大人たちはどうでしたか。

祖母は、泣いていましたね。

今の幸せを後の世代にも残したい

——戦後も三鷹にいたのですか。

三鷹のあたりにも進駐軍が来るというので、子供と年寄りや若い娘だけの所帯では危ないと言われて。なるべく家から出ないように過ごしていました。が、麴町にも焼け跡に家を建てられ



千鳥ヶ淵を見下ろす土手に、今も残る高射機関砲の台座跡

ることになったので、私がまず麴町に呼び戻されたのです。

——すぐに家が建てられたのはすごいですね。

復興住宅といって、2間だけの平屋の家が配給されたのです。そこに両親と私と弟の4人でしばらく暮らしていました。1間は畳敷きですが、もう1間は土間。父はその土間で、理容店を再開しました。

そうして家を持てた私たちは幸運なほうで、中国などから引き揚げて来た方たちは麴町小学校などに、しばらく暮らしていましたよ。授業が再開された教室のかたわらで、おしめなどの洗濯物が校庭に干してあったのを覚えていません。

——僕は麴町小学校の出身なのですが、戦後はそんな時期があったのですね。

想像もつかないでしょう？ それが戦争なんです。皆さんは、今日の私の話を聞いてどう思ったか、聞かせてくれますか？

——教科書などで読んだときは、「遠い昔に大変なことがあったんだな」くらいにしか思っていないんですけど。でも実際に体験した福地さんのお話を聞いて、当時の人たちの大変な暮らしが分かりました。

初めて聞いた方は、刺激が強かったかもしれませんね。でもあなた方のような若い人が当時のことを知って、いろいろなことを考えてくれたら嬉しいですね。人間のすることですから、今後も間違ったことが起きるかもしれません。

そのときにぜひ、今日私がお話したことを思い出して、一生懸命に自分におできになることを頑張つて、平和な世の中を守っていただきたいと思います。

——当たり前を送ってきた生活が、戦時中や戦後の人には難しかったことが分かりました。自分たちは幸せなんだと思つて、一つひとつのことに感謝をして生きていきたいと思いました。

分かってくださつて、とてもありがたいです。大変なこともあったけれど、良い家族にも恵まれて、私は今とても幸せです。あなた方も、このままよく勉強なさつて、今よりもっと幸せになるように心からお祈りしています。



写真左から、三輪田さん、福地さん、吉岡さん

大切な学校は空襲で焼けた

靖国神社に隣接する三輪田学園で、平成11（1999）年まで校長・理事長を務めてきた三輪田芳子さん（94歳）。教育一筋に生きてきた人生の中、学校が空襲で焼け落ちていくのを目の当たりにしたのは何より辛い経験でした。

戦争勃発と同時に教員に

戦争の間は、どういう生活を送ってこられたかお聞かせください。

戦争が始まるまで、私は東京女子高等師範学校（現在のお茶の水女子大学）で勉強していました。4年生だった昭和16（1941）年には、重大な時局ということで卒業が12月に早まり、翌年1月から付属国民学校に教諭として勤務することになりました。

国民学校では下のほうの学年を担当しました。児童は空襲に備えて膝上までの黒靴下やもんぺを履き、素足を出さないようにしていました。胸には住所氏名、生年月日、保護者名、血液型を縫い付け、防空頭巾もいつも肩からかけていました。

その頃から空襲はあったのですか。

最初の空襲は昭和17（1942）年4月18日正午近くです。すごく大きな飛行機が来たもので、子供たちははしゃいで校庭に出ていったんです。飛行帽と飛行眼鏡をつけた操縦士の顔も見えました。けれども機体に日の丸がない。アメリカの飛行機だと分かって、教員たちが「危ないっ」「皆伏せろっ」と。機体は黒い物体をパラパラと落としています。遠くで黒い煙が上がった頃、サイレンが鳴りました。はじめて聞く空襲警報でした。

子供たちを預かる責任も大きかったですね。

1年生は10時半くらいに下校させる決まりでしたが、出迎いの保護者が遅れたりすると昼くらいまでかかります。また警戒警報が鳴るとやはり保護者が迎えに来ます。でも親御さんが来られないお子さんもいて、どうやって守るかを



みわだ よしこ
三輪田 芳子

九段北

インタビュアー

富山愛菜美（大学3年生）

千野彩佳（高校3年生）

西山侑里（高校2年生）

いつも考えていました。校舎1階の廊下は、床板を一部開けて地下に通じる階段を作っており、その下に皆を移動させていました。

——児童が集団疎開した先では、松林で授業をしたそうですね。

昭和19（1944）年8月から、久米川郊外園というところに集団疎開しました。ここは自然観察の授業に使っていた学校農園で、生活するためのところではありません。農具を入れていた建物に床と畳を敷いて3・4年生の宿舎にし、上級生は近くの農家に分宿しました。私は4年生女子の担任で、一緒に生活しました。教室ももちろんありませんので、松林に机やベンチ、黒板を持ち出して、そこで授業や食事をするのです。体操や音楽は近くの原っぱ。雨が降ると寝泊まりする場所でお話会などをしていました。授業後は、3・4年生は燃料の枯れ枝を拾い、5・6年生は防空壕を掘る手伝いをしました。

——そこでの食事はどうしていたのですか。

東京の真ん中よりも食料は手に入りやすく、そんなに困りませんでした。もともと農園でしたし、まわりも普通の農家ばかりなので、そこに材料を買いに行つて作っていました。

——子供さんたちはどんな様子でしたか。

2年生くらいの子小さい子もいましたが、親御さんから離れても皆しっかりしていました。ただ、たまにお母さんが会いにきたりする子がいると、他の子も自分のお母さんが恋しくなつて

しばらく不機嫌になったりしましたが。

私がそこで過ごしたのは1カ月ほどです。結婚を機に退職願いを出しており、9月30日付で許可されて久米川郊外園を去りました。学園は翌年、富山県に再疎開しています。

学校と家は空襲で灰塵に

——それから三輪田高等女学校の教諭になられたのですか。

校長を務めていた義父の勧めでした。当時は校内で授業を受けているのは1・2年生だけで、3年生以上は勤労働員で都内の軍需工場に分散して通っていました。私の仕事は1・2年生の家庭科の授業と、生徒が軽作業をする学校工場の監督、夜間の宿直、警戒警報の際に生徒を無事に帰宅させたり校舎を見回ったりすることなどです。家は靖国神社の隣の学校敷地内でした。夫は軍需会社で働き、警備召集の時には在郷軍人として駆り出されていました。

——昭和20（1945）年3月10日の空襲に遭われた時は、どういう状況でしたか。

9日夜の警戒警報で校舎の防火扉を確認し、防空服装で待機していました。夫は警備召集に出ていました。12時頃に空襲警報が鳴り、義父母と庭の防空壕に飛び込むと、間もなく大きな爆発音がしました。隣家の木下病院という産婦人科に焼夷弾が落ち、燃え上がっていったのです。うちにも火の粉が来ましたが、火たたきを



国民学校

明治から続いた小学校が昭和16年4月1日から「国民学校」と改称された。義務教育の年限を2年延ばして初等科6年、高等科2年とし、教育内容も体育などを中心に国家主義的な色彩を強め、生徒への体罰は珍しくなかった。

水に浸しては消して回りました。病院の職員や入院患者さんは非常用に作っておいたくぐり戸を通して校内に避難されてきました。

うちは幸い燃えなかったもので、避難してきた方たちはしばらく学校の雨天体操場で生活されました。3月で寒い時期でしたが、布団や家具も持ってこられて。空襲後に私たちが住んでいた離れの2階から南の方角を見ると、一口坂の向こうまで焼け、残っているのはコンクリートの九段電話局と、遠くに見える東京家政学院の講堂だけでした。

——大変だったのは4月13日の空襲ですね。

この日は夫も休暇で警備召集隊から戻っていて、鎌倉に住んでいる義姉と小学生の姪2人も泊まりに来ていました。警報のサイレンで目が覚めると、物凄い爆音で飛行機数機が頭上を通りました。最初は防空壕に入りましたが、玄関の門の方に火のついたものがドストスンと落ち、メラメラ燃えていきます。母屋も燃え、校舎に行くとこちらも燃えはじめています。「ここにいると危ない」と、夫や義父母と靖国神社の方に走りしました。神社の相撲場に門があつて、押してみたらその日は偶然開いたんです。それで中に入り、相撲場の見物席から、校舎が燃えるのをなすすべもなく見ているしかありませんでした。

——その時はどんなお気持ちでしたか。

ものも言えない感じですよ。ああ焼けてしまう…と茫然と見ているだけ。どんどん火が回り、

学校の体育館や講堂まで燃え崩れていくのを、神社の樫の幹に寄りかかって見ているしかないんです。創立者の三輪田眞佐子と義父の42年間の努力が、わずか2時間ほどで灰になっていきました。明るくなって戻ると、離れがあつたあたりに愛用のピアノの残骸があり、とても悲しかったのを覚えています。

爆撃を避けながら鎌倉から通勤

——空襲の時はどんなものを持って逃げたのですか。

警報が鳴ると防空壕に入ると決めてあり、最低限必要なものは壕の中に置いてあります。自分で必要なものは肩に背負って入ります。狭いのでそんなにたくさんは持っていきません。大事なもののだけ。

——大事なものは。

逃げた先で生活するための証明になるようなものです。他はわずかです。肩から下げられる程度ですから。後は自分の身を守るだけです。けれど、そういう時代でも隙を見ている人はいます。物が無い時代ですから。何とか焼けずに残っていた衣類などを入れた手提げカバンなどを物かげに隠しておいたのに、わずかの間、その場を離れた隙に盗られたこともあります。

——周りの人たちは空襲警報が鳴るとどんな感じでしたか。

パニックになるというより、それが当たり前



空襲警報・警戒警報

サイレンやラジオ放送で伝達された。空襲警報は6秒間10回の吹鳴反復。警戒警報は数10秒間の吹鳴。ラジオでは「東部軍管区情報 東京地区、空襲警報発令」と番組に割り込んできた。「空襲警報発令」と警戒団員が大声で叫んで回っていた。

になっていました。お濠ほりのところにも防空壕が掘ってあって、いろんな人が逃げ込んでいました。中に入ればほっとした様子で、収まるのを待って、また出て戻るんです。

——家が焼けた後は、どこで暮らしていたのですか。

神社から靖国通りを隔へだてた、今の平安堂ビルがある隣に夫の知り合いの家があり、全員疎開しているということで貸してもらえました。授業を再開した仮校舎にも近く、便利でした。

ところがこれも5月25日から26日にかけての空襲で焼けたのです。裏の住宅からどんどん燃え広がり、物干し台に火がついて、夫と共に千鳥ヶ淵うちぼりの内濠うちぼりの方、九段上の消防署があったあたりを指して走りました。坂の途中に止まっていた消防車にも火がつき、燃えながらのろのろと坂下に滑り落ちていくのを見ました。夜が明けると、義父母は道路の向こう側にある昔の灯台の下にいました。六番町の義姉とは靖国神社の石灯籠いしとうろうのところで会うことができました。——それから疎開されたのですね。

鎌倉に夏の家がありましたので、もうそこに行くよりしようがないと、義父母たちは乗り合いのトラック、私たち夫婦は南新宿駅まで歩いて行き、そこから電車で和田塚駅まで行きました。夏の家は母屋と離れがあって、そこに落ち着き、夫は会社、私は仮校舎に横須賀線で通勤するようになりました。

7月に入ると爆撃も激しくなり、走っている



今も残る靖国神社の石灯籠

列車に機銃掃射^{キョウシュウバウ}をすることもありました。列車が止まっていると必ず狙われますから、とにかく急いで離れなきゃいけない。空襲警報が鳴ると電車から線路に飛び降りました。走って木の陰や草の陰に隠れ、飛行機がいなくなったら戻ってくるんです。すぐそばに爆弾が落ちたこともあります。爆撃が遠ざかると、また列車に戻るのですが、飛び降りるよりも戻るのが大変で。下から支えてもらったり、足を持ってもらってやっこのことです。通勤する日々の中で、何回かこんなことがありました。今思い出しても、よくあんなことができたなと思いますね。

今も残る当時の癖^{クセ}

——終戦はどこで迎え、どう感じましたか。

鎌倉で、義父母たちと玉音放送^{ぎよんほうそう}を聞きました。ああやっとなら終わったという感じでしたね。毎日空襲におびえながら東京に通っていて、やっと普通に通勤できると思いました。それまではどこで空襲に遭うか分かりませんでしたから。

——その後もしばらく鎌倉に。

昭和25（1950）年まで鎌倉にいました。昭和20（1945）年4月になると甥や姪^{めい}が疎開先から戻り、義兄も南方から無事帰国し、多い時は17人が暮らしていました。食べ物や東京よりは手に入りやすかったですよ。庭では義父母がカボチャを育てていました。でも17人もいるとお手伝いさんは大変だったと思います。

鎌倉は東京を焼け出されて移り住んでいる人が多く、通勤電車はいつも満員でした。東京に通っている小学生もいて、甥や姪もそうでした。——東京はずいぶん変わっていましたか。

私の近くは残っている建物は少なかったですね。木造が多かったから。どこに何があったか思い出すのも難しいほどでした。学校の仮校舎では、ノートも机もありませんでしたから、白百合学園など焼けなかった学校から譲っていただいで使っていました。

——戦争当時の物で、今もお持ちの品はありますか。

区内の家にあったものは、ほとんど焼けてしまいましたので、あまり残っていませんね。鎌倉での疎開の際に使っていた食器は今でもうちで使っています。あと残っているといえば、大事なものは肩かけカバンに入れるという癖でしょうか。

——人生の中で大切にしていることはありますか。

大変な空襲に遭いながらも逃げ延びてこれたのは何よりもありがたいこと。仕事がいちばん大事だと思って暮らしてきたのは戦中戦後も変わりませんが、毎日が必死の思いでした。当時は「楽しいこと」とか「自由」や「平和」ということを考える余裕すらありませんでした。今の若い人には「自由」や「平和」について考えることができる幸せを、大切に暮らしていただいてほしいと思っています。



写真左から、西山さん、千野さん、三輪田さん、富山さん